

2015年7月10日

## プロジェクト報告書

気候変動問題への文学的アプローチの研究ならびに  
アイスランドの環境人文学に関する調査 (No.15-8)

結城正美 金沢大学教授

私はエコクリティシズム（環境文学研究）を専門領域とし、これまで北米、東アジア、北欧を主なフィールドとして環境問題を文学的観点から研究してきました。本プロジェクトは、スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団と渡辺信託基金の支援を受けアイスランドをフィールドとする環境人文学の研究に取り組むもので、昨年度貴財団の助成を受けて開始した研究プロジェクト (No.14-11 「北欧の環境人文学に関する萌芽的研究」) を発展させたものです。

三週間の滞在期間中、具体的に二つの課題に従事しました。ひとつは気候変動をめぐる文学研究、もうひとつは環境人文学の理論的・実践的研究です。アイスランドは近年関心が高まっている地熱発電への取り組みで知られ、気候変動のなかでもとりわけエネルギー問題と関連した文学作品の存在が際立っています。また、首都レイキャヴィークがユネスコ文学都市に認定されている事実に象徴されるように、アイスランドにはサーガをはじめとする独自の文学的伝統があります。そうした重厚な文学的営みと歴史や考古学の関心が交わる地点で、とりわけアイスランドの自然・文化環境に着目するかたちで学際的研究を進める「環境人文学」が近年発展しており、ちょうど北部アイスランドで環境人文学の集中セミナーが開かれる時期にあわせて本プロジェクトのスケジュールを組みました。

2015年5月29日、午後11時30分過ぎにケプラヴィーク国際空港に到着。経由地のパリからアイスランドに向かう機内で、時間は確実に夜中へと進んでいる一方で空が明るくなっていく様子を目にしながら、日が沈まない北の地へ向かっていることを実感しました。空港から直行バスでレイキャヴィーク市内へ向かい、バスターミナルで下車すると、電子メールで打ち合わせたとおりレイキャヴィークアカデミーの Viðar Hreinsson 氏が迎えにきてくれました（初対面でしたが SNS をとおして写真をみていたので迷うことなく互いに気づきました）。夜中の1時過ぎ、白夜の薄明のなか車で市内案内を受けながらホテルへ送っていただきました。Hreinsson 氏の気さくで配慮に満ちた歓待は、初めてこの地を訪れる私の緊張をほぐしてくれ、大変ありがたかったです。

翌30日から6月4日まで、アイスランド大学図書館や国立アイスランド博物館で、アイスランドの文化、環境、文学に関する研究調査をおこないました。その間、アイスランド大学国際課プロジェクトマネージャーの Hafliði Sævarsson 氏には実務面で助けていただき、スムーズに日常生活を送ることができました。レイキャヴィーク滞在はほんの一週間余りでしたが、Hreinsson 氏と

Sævarsson 氏の二人から勧められた Andri Magnasson の文学実践に注目し、エネルギー、環境、経済の問題への文学的アプローチについて検討しました。Magnasson の著書 *Dreamland* に触発されて訪れた地熱発電所では、環境への負荷が小さく「クリーン」だとみなされている地熱エネルギーの表象と実態の乖離について大いに考えさせられました。

6月5日からは、本プロジェクトのハイライトである環境人文学集中セミナーに参加するため、北部のキダギルへ。大学院生対象の集中セミナーだけあって朝から晩まで講義やフィールドワークでタイトなスケジュールでしたが、ハイランドの壮大な自然のなかでの10日間は加速化する都市文明を相対的に考える上で最適な場所でした。セミナーの主なテーマは中世アイスランドの土地の記憶です。環境問題への取り組みには現代の状況を相対的にとらえることが不可欠ですが、その足場として過去に着目することの意味は小さくありません。アイスランド北部の過去——土地の記憶——を、歴史、文学、考古学等さまざまな学問分野から相互関連的に検討し、また実際にその土地をフィールドワークすることにより、過去の記憶に多角的に接近することを目指したセミナーでした。これはHreinsson氏を中心として企画されたもので、アイスランド、スウェーデン、米国、英国などの研究者を講師とし、専門分野だけでなく文化や世代も横断するダイナミックな学術環境を目指しており、運営面で学ぶことも多かったです。前年に貴財団の支援を受けて参加したミッドスウェーデン大学での環境人文学シンポジウムで知己を得たアイスランド大学のÞorvarður Árnason氏も視覚的環境表象の講義を担当され、セミナー期間中に彼が主にフィールドとしている氷河ならびに気候変動の話聞くことができました。さらに、ミッドスウェーデン大学のSteven Hartman教授とも再会し、研究交流を深めました。

6月15日にキダギルを発ち、往路同様、文学的・歴史的・考古学的に興味深い場所の説明を受けながらレイキャヴィークへ。16日は作家 Andri Magnason 氏と歓談する機会に恵まれました。Sævarsson、Hreinsson 両氏に紹介していただいて実現したのですが、研究対象としている作品の書き手本人に会えるとは思っていなかったのも、うれしい驚きでした。その後、アイスランド大学で Sævarsson 氏にキダギルでのセミナーについて報告し、大学図書館で最後の資料整理に取り組み、17日午前の便で帰国の途に着きました。

本プロジェクトでは、アイスランドに実際に来なければ気づかなかつたであろう環境言説の複雑さや危うさ、そして草の根的な取り組みの力強さを目の当たりにし、またセミナー参加をとおして多くの研究者と交流を深めることができました。実践例をとおした理解と考察、そして多くの研究者との交流は、これから日本で環境人文学的知の再編を考えるための強固な足場となります。本プロジェクトの成果は論文に組み込み、既に執筆が確定している論文集『〈他者〉とつながる、ということ——環境人文学の可能性』（仮題、勉誠出版より刊行予定）に寄稿するほか、2015年7月17日～19日に開催される異分野・異世代交流型集中セミナー「浅間大学院セミナー」（安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター主催）でのレクチャーで紹介する予定です。

最後になりましたが、本プロジェクトへの貴財団の支援に心から謝意を表します。